

日付:2015年10月4日／聖書:エレミヤ書1:1～10(参照11～13節)

説教:「我が道を横切る神」

「我が道を横切る神」とは、ドイツの神学者ボンヘッファーの言葉である。「我々は、神によって我々の仕事を中断させられる用意がなければならない。神は、我々に、要求と願いを持った人々を送り給うことによって、常に繰り返して、日毎に、我々の計画を妨げ給う。祭司が、強盗に襲われた人のかたわらを通り過ぎて行ったように、我々は一日の重要な事柄に没頭して、たとえばおそらく、聖書に読みふけりつつ、これらの人たちのかたわらを通り過ぎてしまうということも有り得るのである。」

神は若きエレミヤの道を横切る。エレミヤは、南ユダ国ベニヤミンの地の小さな村アナトの祭司の見習だ。父親がその村の祭司で将来、父の後継ぎを夢見ていた青年であった。その青年の道を横切る神の言葉が記されている。「諸国民の預言者として立て」と。ただこのエレミヤは、小さな村の青年だからといって、ただぼうっと過ごしている若者ではない。11節以下には、「エレミヤよ、何が見えるか」と神の問いが記されている。その時、エレミヤと神の視点が一致する。エレミヤは「煮えたぎる鍋が見えます。北からこちらへ傾いています」という。それは北から襲来するバビロニア軍に滅ぼされることを意味した。エレミヤが、ただぼうっとしていたら何となく見えたというのではない。しっかりと南ユダ国の政治姿勢と社会情勢、近隣諸国の緊迫した状況を見ていたということである。そういう視点を持つエレミヤの道を神は横切る。

今、日本の置かれた政治姿勢と社会情勢は、非常に緊迫している。日本は戦争が出来る国づくりによって、平和を保つという誤った平和観があり、それはかつての古い考え方で、他国よりも多く優れた武力を持つことによつて、平和を築こうとする考え。それは結局、戦争への道に進み、若者や年寄りが多くの犠牲を伴うことが、これまでの歴史で私たちは知らされているはずだ。先月の敬老の日に母と家族で平和の礎を尋ねた。そこに祖母の仲里カマさんやいとこの子どもたちの名前が刻まれている。花を添え、名前のあるところに水をかけながら、やはり涙が込み上げてくる。生きて会いたかった、どんなに苦しい思いをして死んでしまったのか、その時、改めて戦争は二度と起こしてはいけないということを思われる。

私たちは日常の忙しさに負けて中々社会情勢のことに目が行き届かなかつたりするが、しかし、私に出来るところからそういう視点を意識して行きたい。「我が道を横切る神」に気づかされ、平和の主の御声を聞く者でありたい。若者に過ぎない者であっても。(神谷)